

「仕方がない」とあきらめずに、果敢に挑戦

～変わらないけれど、でも、少しは光が見えてくる感じが～

星野晴彦（文教大学教

授）

自分は学生に障害者福祉論を教えています。しかし、精神障害者の方の支援については十分に理解していないことがよくわかりました。

反省しています。

同時に人は何でこんな残酷なことをしてしまっているのだろう、と思わざるを得ません。

特にショックを受けた病院の施設内の改善について述べさせていただきます。実はビデオを見ていて、隔離病室にトイレットペーパーがないことにショックを受けました。そんな細かいことを、とおっしゃるかもしれませんが、これは人を人として見ていないということの象徴のように思いました。動物以下だと思えます。

なぜ精神障害の方が、このような目に合わなければならぬのか。

また同時にこの環境の中にいることを前提として、処遇がなされ、本人が次の展望を持ちにくくなってしまふことの危険性にも気づかせていただきました。

改めて考えてみると、精神障害の方に対して、社会が過剰に怖がっているという現実があります。自分たちと一見、違うということが、その不安感を過剰にするのでしょう。

このような劣悪な処遇が一般の小学校のようなところで行われたら、親や社会は学校や教師を糾弾するでしょう。そして、学校側はすぐに陳謝するでしょう。しかし、精神障害者の方に対してはどこかでこのような処遇が行われていても、どこかで認めてしまうような心理が働いてしまうのだと思います。

とても恐ろしいことだと思います。

このような状況の中で、病院内の施設改善に勇気を出して取り組んでおられる大阪の方々の姿を知り、力づけられました。

「仕方がない」とあきらめずに、果敢に挑戦しておられる姿は素晴らしいと思います。システムがあるとはいえ、ここで本気で取り組んでいる人がいるか

からこそ、システムも動いているのだと思います。

他方で病院が二極分解しているとのお話でした。

福祉サービス一般にも、そのような現象がみられます。

劣悪なところでは、施設改善に向けてアドバイスを真摯に聞くことは少ないかもしれません。そもそもなかなかアクセスできないかもしれません。

でも負けずに頑張っておられる姿は、今福祉が予算削減などを求められ、逆風が吹いているときに貴重な姿だと思います。

私たちは、ともすると福祉制度がこう変わったと、一喜一憂したりします。そして評論家のように述べたりします。しかし、それでは何も進まないのです。そもそも人が生きることに関わり添う姿勢を失ってはならないと思いました。

とても力づけられるお話どうもありがとうございました。